

花をうめる

新美南吉

青空文庫

その遊びにどんな名がついているのか知らない。まだそんな遊びをいまの子どもたちがはたしてするのか、町を歩くとき私は注意してみるがこれまで見たためしがない。あのころつまり私たちがその遊びをしていた当時とうじでさえ、他の子どもたちはそういう遊びを知っていたかどうかもあやしい。いちおう私と同年輩どうねんぱいの人にたずねてみたいと思う。

なんだか私たちのあいだにだけあり、後にも先にもないもののような気がする。そう思うことは楽しい。してみると私たちのなかまのたれかが創案そうあんしたのだが、いったいたれだろう、あんなあわれ深い遊戯ゆうぎをつくり出したのは。

その遊びというのは、ふたりいればできる。ひとりがかくれんぼのおにのように眼めをつむつて待っている。そのあいだに他のひとり道ばたや畑にさいているさまざまな花をむしってくる。そして地べたに茶飲ちやのみちやわん茶碗ほどの——いやもつと小さい、さかさきほどの穴あなをほりその中にとつてきた花をいい按配あんばいに入れる。それから穴あなに硝子がらすの破片はへんでふたをし、上に砂すなをかむせ地面の他の部分とすこしもかわらないようにみせかける。

「ようしか」とおにが催促さいそくする、「もうようし」と合図あいずする。するとおにが眼めをあけてきてそのあたりをきよろきよろとさがしまわり、ここぞと思うところを指先でなでて、花のかくされた穴あなをみつけるのである。それだけのことである。

だがその遊びに私たちが持った興味きょうみは他の遊びとはちがう。

おににかくしおおせて、おにを負かしてしまふということや、おにの方では、早くみつけて早くおにをやめるといふことなどにはたいして興味きょうみはなかつた。もつぱら興味きょうみの中心はかくされた土中の一握ひとにぎりの花の美しさにつながっていた。

砂すなの上にそつとはわせてゆく指先にこつんとかたいものがあたるとそこに硝子がらすがある。硝子がらすの上の砂すなをのける。だがほんのすこし。ちようど人さし指の頭のあたる部分だけ。穴あなからのぞく。そこには私たちのこのみなれた世界とは全然別の、どこかはるかなくべつての、おとぎばなしゆめか夢ゆめのような情じょう趣しゆを持べつてった小さな別天地べつてんちがあつた。小さな小さな別天地べつてんち。ところがみているとた

だ小さいだけではなかった。無^む辺^{へん}際^{さい}に大^おきな世界^{せかい}がそこ^こに凝^ぎ
縮^{しゆく}されて^くいる小^こささ^さであつた。そのゆえにその指^ささ^さき^きの世界^{せかい}は
私^{わたし}たち^ちをひきつけてやまなかつたのである。

いつもその遊^{あそ}び^びをしたわけではない。それをするのは夕^{ゆう}暮^{ぐれ}が
多^おかつた。木^きにのぼつたり、草^{くさ}の上^{のうへ}をとびまわつたり、はげしい
肉^{にく}体的^{てき}な遊^{あそ}戯^ぎ^{ゆうぎ}につかれてきて、夕^ゆま^まぐ^ぐれの青^{あお}や^やかな空^{くう}気^きのなごや
か^かさに私^{わたし}たち^ちの心^{こころ}も何^{なに}がな^なしとけ^けこんでゆ^ゆく^くこ^ころ^ろにそれ^{それ}をした。
それ^{それ}をする相^あ手^ても、た^たれ^れであ^あつ^つてもか^かま^まわ^わぬ^ぬとい^いう^うの^のではな^なかつ
た。第^{だい}一^{いち}そ^そんな遊^{あそ}び^びを頭^{あたま}からこ^このま^まな^ない^いな^なか^かま^まもあ^あつた。女^{おんな}の子^こ
は^はた^たいて^{いて}い^いす^すき^きだ^だつた。

ふ^ふた^たり^りい^いれ^れば^ばで^でき^きる^ると私^{わたし}は^はい^いつ^つた^たが、ひ^ひと^とり^りで^でも^もで^でき^きな^ない^いこ^こと

はなかつた。私はひとりでよくした。ただひとりのときは自分がふたりになつてするだけのことである。つまり花をとつてかくしておき、そこからすこしはなれたところへできうべくんば家の角を一つまわつたところまで、いつておにになり、眼をとじて百か二百かぞえ、それからさがしに出かけるのである。

だがそれをひとりでするときは心に流れるうらわびしさが、硝子らすの指先にふれる冷たさや、土のしめっぽい香かおりや、美しい花の色にまでしみて余計よけいさびしくなるのだった。

ふたりか三人でその遊びをしたあと、家へ帰る前に美しい作品を一つ土中にうめておきそのまま帰ることもあつた。その夜はとぎどきうめてきた花のことを思い出し床とこの中でも思い出してねむ

るのである。

そんなとき土中のその小さな花のかたまりは私の心の中のたのしい秘密ひみつであつて、母にもたれにも話さない。つぎの朝いつてさ
がしあててみると、花は土のしめりですこしもしおれずしかし明
るい朝の光の中ではやや色あせてみえ私はそれと知らず幻滅げんめつを
覚えたのであつた。また前の晩ばんにうめておいた花のことをつぎの
朝、子ども心の気まぐれにわすれてしまうこともあつた。そうい
う花が私たちにわすられたままたくさん土にくちてまじつたこと
だろう。

私たちは家に帰る前に、また、そのとき使つた花や葉を全部あ
つめほんとうに土の中に土をもつてうめ、上を足でふんでおくこ

ともあった。遊びのはてにするこの精算は私の心に美しいもの純じゆん潔けつなものをもたらしした。子どもでありながらなんといじらしいことをしたものだらう。

ある日の日暮ひぐれどき私たちはこの遊びをしていた。私に豆腐屋とうふやの林太郎りんたろうに織布しよくふ工場のツル——の三人だった。私たちは三人同い年だった。秋葉あきはさんの常夜燈じょうやとうの下でしていた。

ツルは女だからさすがに花をうまくあしらい美しいパノラマをつくる、また彼女かのじよはそれをつくり私たちにみせるのが好きだった。ではじめのうち林太郎りんたろうと私のふたりがおにでツルのかくした花をさがしてばかりいた。

私はツルのつくった花の世界のすばらしさにおどろかされた。

彼女は花びらを一つずつ用い草の葉や、草の実をたくみに点景てんけい

した。ときには帯おびのあいだにはさんでいる小さい巾きんちやく着やくから、

すなつぷ

なんきんだま

砂粒すなつぶほどの南京玉なんきんだまを出しそれを花びらのあいだに配はいした。ま

るで花園に星のふったように。そしてまた私はツルがすぎだった。

遊びにはおのずから遊びの終わるときがくるものだが、最後にツルと林太郎とふたりで花をかくし私がひとりおにになった。

「よし」といわれて私はさがしにいったが、いくらさがしてもみ

あたらない。「もつと向こうよ、もつと向こうよ」とツルがいう

ままにそのあたりをなでまわるがどうしてもみあたらない。林りんた

太郎ろうたうはにやにや笑わらつて常夜燈じょうやとうにもたれてみている。林太郎は

ただツルの花をうめずめるのをみていただけに相違そういない。「お茶わ

かしたよ」ととうとう私はかぶとをぬいだ。すれば、ツルの方で意外のところから花のありかを指摘してきしてみせるのが当然なのだがツルはそうしなかった。「せいじや明日あしたさがしな」といった。

私は残念でたまらなかったのでまた地びたをはいまわつたがついにみつからなかった。でその日は家に帰つた。たびたび常夜じょうや燈とうの下の広くもない地びたを眼めにうかべた。そのどこかに、ツルがつくつたところのこの世のものならぬ美しさをひめた花のパラマがあることを思つた。その花や南京玉なんきんだまの有様ありさまが手にとるように閉とじた眼めにみえた。

朝起きるとすぐ私は常夜燈じょうやとうの下へいつてみた。そしてひとりでツルのかくした花をさがした。息をはずませながら。まるで金

でもさがすように。だがついにみつからなかった。

それから以後たびたび思い出してはそこへいつてさがした。花はもうしおれはてているだろうということはずしも考えなかつた。いつでも眼を閉じさえすれば、ツルのかくした花や南京玉が、水のしたたる美しさでうす明かりの中にかぶのであつた。たれか他の者ほかにみつけ出されると困こまるので、私はひとりのときにかぎつてそこへさがしにいった。

遊び相手がなくてひとりさびしくいるとき、常夜燈じょうやとうの下にツルのかくしたその花があるという思いは私を元気づけた。そこへかけつけ、さがしまわるあいだの希望きぼうは何にもかえがたかつた。いくらさがしてもみつからない焦しょうそう燥そうもさることながら。

ところがある日、私は林太郎りんたろうにみられてしまった。私が例のように常夜燈じょうやとうの下をすみからすみまでさがしまわっている、いつのまにきたのか林太郎が常夜燈じょうやとうの石段いしだんにもたれてとうもろこしをたべていた。私は林太郎にみられたと気づいた瞬間しゆんかんぬすみの現行げんこうをおさえられたようにびくつとした。私はとっさのあいだにごまかそうとした。

だが、林太郎りんたろうは私の心の底までつまり私がツルをすいているということまでみとおしたようににやにやと笑わらつて「まださがいとるのけ、ばかだな」といった。「あれ嘘うそだっただよ、ツルあ何も埋いけやせんだっただ」

私は、ああそうだったのかと思った。心についていたものの

ぞかれたように感じて、ほっとした。

それからのち、常夜燈じょうやとうの下は私にはなんの魅力みりよくもないものになってしまった。ときどきそこで遊んでいて、ここには何もかくされてはないのだと思うとしらじらしい気持ちになり、美しい花がかくされているのだと思いこんでいた以前のことをなつかしく思うのであった。

林太郎が私に真実しんじつを語らなかつたら、私にはいつまでも常じょう夜燈やとうの下のかくされた花の思いは楽しいものであったかどうか、それはわからない。

ツルとはその後、同じ村にいながら長いあいだ交渉こうしょうをたっていたが、私が中学を出たときおりがあつて手紙のやりとりをし、

あいびきもした。しかし彼女かのじよはそれまで私が心の中で育てて
いたツルとはたいそうちがつていて、普通ふつうのおろかな虚栄心きよえいしんの強
い女であることがわかり、ひどい幻滅げんめつを味わったのは、ツルが
かくしたようにみせかけたあの花についての事情じじょうと何か似にてい
てあわれである。

青空文庫情報

底本：「花をうめる 新美南吉童話作品集5」てのり文庫、大日本図書

1989（平成元）年4月26日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集第三巻」大日本図書

1980（昭和55）年7月31日初版第1刷発行

初出：「ハルル賓日日新聞」

1939（昭和14）年10月15日～10月31日

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月18日作成

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花をうめる

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>